

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

	項目数
I. 理念に基づく運営	11
1. 理念の共有	2
2. 地域との支えあい	1
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	3
4. 理念を実践するための体制	3
5. 人材の育成と支援	2
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援	2
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	6
1. 一人ひとりの把握	1
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	11
1. その人らしい暮らしの支援	9
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
合計	30

事業所番号	4360290003
法人名	有限会社あい
事業所名	グループホームあい
訪問調査日	平成 20 年 3 月 7 日
評価確定日	平成 20 年 4 月 10 日
評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」

○項目番号について

外部評価は30項目です。

「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。

「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。

番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

○記入方法

[取り組みの事実]

ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。

[取り組みを期待したい項目]

確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に○をつけています。

[取り組みを期待したい内容]

「取り組みを期待したい項目」で○をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

○用語の説明

家族等 = 家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家族 = 家族に限定しています。

運営者 = 事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者(経営者と同義)を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員 = 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム = 管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

1. 調査報告概要表

作成日 平成20年 3月19日

【評価実施概要】

事業所番号	4360290003
法人名	有限会社 あい
事業所名	グループホームあい
所在地	熊本県八代市島田町863-3 (電話) 0965-30-8952

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本県熊本市水前寺6丁目41-5
訪問調査日	平成20年3月7日

【情報提供票より】(平成20年2月10日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 15 年 4 月 1 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	9 人	常勤 8 人, 非常勤 1 人, 常勤換算 8 人	

(2) 建物概要

建物構造	木造 造り		
	2 階建ての	1 階 ~	階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	38000~41000 円	その他の経費(月額)	23100円他実費
敷 金	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(300000 円)	有りの場合 償却の有無	有
食材料費	朝食	262 円	昼食 420 円
	夕食	420 円	おやつ 105 円
	または1日当たり 円		

(4) 利用者の概要(2月10日現在)

利用者人数	9 名	男性 3 名	女性 6 名
要介護1		要介護2	
要介護3	4 名	要介護4	1 名
要介護5	4 名	要支援2	
年齢 平均	85.66 歳	最低 81 歳	最高 93 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	田中泌尿器科外科医院、中川外科医院、林整形外科医院、浜田呼吸器内科クリニック、八代病院、鏡歯科医院
---------	---

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

八代新幹線駅舎のすぐそば、住宅地の中に普通の住まいとして溶け込んだホーム。「介護してあげる」とか「介護されている」というより、支えて貰いながら共に暮らす「新しい住まい」というイメージ。決して広いとは言えない普通の住まい。丁寧が目立つ訳でもないが、気取りがなく何処にもある大所帯の仲の良い家族の暮らし。比較的介護度が高い入居者が多いにもかかわらず、理念である「我のままに暮らす」ことを大切にされた支援が行なわれている。看取りの経験を持ち、最後までホームでの生活を過ごした入居者家族からの「感謝状」が茶の間に飾られ、思い出のビデオが残されている。血は繋がらないが、入居者・職員がひとつの「大家族」として、日々を過ごしている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目	<p>前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)</p> <p>前回は職員の休憩時間が充分に取れていないのではないか、という改善課題が出されていた。現在も、入所者への対応を重視し、はっきりと休み時間としての区別を付けず「入居者と一緒にゆっくりする」という対応のようであった。一生懸命とゆりのバランスを配慮し、職員の休息の取り方をさらに工夫されると良いと思われた。</p>
	<p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>① 職員による自己評価の書き込みはできていないが、評価項目に目を通し、何が評価されるのかを認識して意見を出し、管理者がまとめている。評価項目を認識することで日々の仕事の確認と見直しが実施された。出来ていることの確認と、補足すべき点の発見が、今後の質の向上に繋がると認識されていた。</p>
重点項目②	<p>運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)</p> <p>推進会議に参加してもらうことで、地域住民・婦人会・老人会幹部へ、ホームの存在感や認知症の理解向上に繋がっている。地域行事への参加機会が増え、地域住民としての認識も高くなってきている。</p>
重点項目③	<p>家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)</p> <p>家族の訪問が多く、日常的に意見や要望が出し易く、聴き取りやすい雰囲気が形成されている。家族と入居者の絆を断ち切らないように、日帰りで自宅訪問を行ったり、家を見に行くなど、入居者の不安解消と家族への安心提供が行なわれている。また、家族・本人の要望でホームでの看取りも行なわれ、家族からの「感謝状」もみられた。</p>
重点項目④	<p>日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)</p> <p>地域の清掃活動に職員が参加し、通常の挨拶声掛けなど、住民としての認識は高まり、校区の敬老会や公民館祭りに参加するなどの交流が生まれている。しかし、災害時の非難訓練等を共同で行なうまでには至っていない。</p>

2. 調査報告書

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	利用者が「我のままに暮らす」ことが出来るように支えたい。そのためにスタッフが力を貸す。出会い・ふれあい・支えあい・慈しみあい、地域の中で一つの家族として過ごしたい…と、全職員が係わって作ったという、事業所独自の理念が掲げられていた。	<input type="checkbox"/>	
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	利用者は平均介護度4。求められる「我のままに暮らす」ことはそれぞれに異なり、日々変化している。理念を形からの取り組みとしてではなく、一人の人として大切にすることを見据えたスタッフの取り組みが実践されている。	<input type="checkbox"/>	善し悪しではなく、家族と同様に、もしくは以上に、共に時間を過ごす仲間として、「仕事」の意義を見つけながら、大切な係わり合いが持たれている。今後も継続した取り組みに期待したい。
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	住宅地に普通の民家を改良して設立されたホームの暮らしから、同じ敷地内裏手に新築されたホームへ移転した。設立後から町内会に入り、校区の敬老会や公民館祭りに参加しており、地域との交流には積極的。散歩の際の挨拶・会話はもとより、清掃活動にも職員が参加し、近隣の住民から野菜の収穫物の差し入れがあるなど、良好な係わりが保たれている。	<input type="checkbox"/>	老人会への入会を希望しているが、入居者の介護度が高く、どのような活動ができるか、管理者は不安視している。しかし、全員でなくても、できる人だけでも参加し、ホーム外の人達との交流が広がることを期待しての働きかけであるので、「老人会」入会後の成果が期待される。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	外部評価に当たって、職員が自己評価の項目に眼を通し、出された意見を管理者がまとめている。職員による全項目の書き込みはできていないようだが、評価項目の全てに目を通すことで、日々の仕事の意識付けと見直しを行ない、改善に取り組んでいる。	<input type="checkbox"/>	評価項目に目を通すだけでなく、その内容や目的について、どのように評価するか、各自書き入れることで、問題点が明確になることも多い。時間を要し、大変な作業だがその実施に期待したい。
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進会議で参加者に資料として使われた、行事の写真入り報告書が玄関に掲示され、家族にも配付されている。資料に添付された入所者の楽しそうな外出時の姿や、勉強会の報告などの取り組み紹介は、まず、ホームの理解を高めること、ホームへの来訪を増やし、係わり強化を図ること等が意識されている。婦人会会員の出席で敬老会へのスムーズな参加に繋がり、町内会役員には認知症の理解が高まっている。	<input type="checkbox"/>	推進会議ではホームの話を聞くばかりではなく、認知症への対応など、質問も出るようになったということで、ホームを訪問しても「何をしたら良いか分からない」が少しずつ解消されてくるものと思われる。根気よい関わり強化が望まれる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	グループホームへの入所が制限される、胃ろう・インシュリン使用者の対応等、ホームで看取りまで係わるために必要となることが考えられる諸問題を行政に投げかけたり、介護の質向上講習会の講師紹介など、協力を得ている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々に合わせた報告をしている	「利用者」の要望や想いは、家族と本人では必ずしも一致しないことがあり、ホームでの暮らしぶりや健康状態を報告することで、現状を知ってもらい、理解を得る対応が図られている。利用者に担当を決め、面会時の説明や、電話・手紙を活用して、より詳しい状況説明が行なわれている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者家族は要望を出しにくいものである事から、担当制で積極的に日々の状況を報告し、要望等の引き出しを図っている。家族の来訪を求めるだけでなく、職員が付き添って入居者が自宅を訪問し、様子を知ってもらう取り組みも実施。要望がある家族には「要望ノート」を作り、一項目ごとの検討を行ない運営に反映させた経験を持つ。	○	入居者で「ダイヤモンド婚」を迎える方がおり、ご主人を迎えてホームでお祝いをする計画があるが、米寿の祝いを実施するのと同様に、家族の意見を反映したものになっている。
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者や家族の要望や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の移動はあまりなく、入所者との良好な関係が構築されている。職員と利用者の会話やボディタッチ・触れ合う様子は、孫と祖母・祖父との関係のように温かく、ホソワリとしたものになっている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月2回の割合で施設内研修を実施。グループホーム連絡会の勉強会にも積極的に参加をしているが、一番の勉強は入居者の表情や対応に対する現場教育。どうすれば喜んでもらえるか、満足に繋がるか、日々観察し対応する管理者・職員の一体となった実践教育が見られた。	○	働きながらのトレーニングは管理者・職員が一体となった実施がおこなわれており、介護福祉士の受験や、実践リーダー研修への参加も予定されている。実践教育に外部研修・資格取得が加わることで、記録への対応も工夫が加わり、更にステップアップする取り組みが期待される。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域のグループホーム連絡会ができ、ネットワーク活動も始まって、スタッフの交流研修も考えられたが、ホーム毎に異なる介護度の利用者への対応は、研修とは異なる現実もあり、実現には至っていない。利用者が異なれば対応は変わる事を見据えて、ホームごとの対応の違いの中から学ぶことも多いと思われるので、研修の受け入れのみではなく、他施設での実習も参考になって良いと思われる。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心して、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用者の殆どが病院や老健施設を経由しての入居となっており、家族が事前にホームを訪問・見学し、雰囲気や様子を知ってもらう対応が主で、ホームからは入院先にお見舞いに行き、顔を合わせる程度となっている。	○	入院先の病院や老健施設から、日帰りでの「体験通所」や、外泊で「お試し入所」など、利用開始前にホームの雰囲気を知り・馴染んでもらうための仕組みがあると、さらに良いと思われる。
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	介護度が高い利用者が多く、共に「何かをする」ことは難しいようだが、それでも、できる人には野菜の下拵えや食後の後片付けなど、出来る喜びを共有する様子が見られた。歌を唄ったり肩を抱き合ったり昼寝したり、家族以上の温かい交わりが感じられ、仕事と言うより楽しい「共同生活者」としての関係が大切にされているようであった。	○	「介護してあげる」より「一緒に時を過ごしている」という関わりが強く感じられるのは、意識したホームの方針と思われる。多忙な中に「ホッ」とする光景が、今後も更に多く見られることを期待したい。
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	思いや希望を言葉で表せる入居者は少なく、表情や態度、発せられる言葉から、希望や意向を推察している。今、何をしたいのか、何を考えているのか・・・手を握り、肩を組み、体を寄せ合うことで、入居者の気持ちを知らうとする職員の姿がみられた。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	入居者本位の介護計画立案の基本として、その人らしさを知らうためにセンター方式で情報を収集。あるべき姿に近づくためにどうしたら良いかを大切に、家族の意見と、ICF・アセスの双方を見ながら、それぞれの担当者が計画を立案。時として家族の希望を重視し、家族のための計画になりがちなこともあり、本人第一を忘れないプランの作成に力が入れられている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	入居者の短期目標に基づいた介護を行い、カンファレンス後に、その後の見直しを図っている。家族の訪問が多く、意見の収集も頻繁に行なわれ、状態変化時等の対応も、家族の意向を反映させた計画見直しが可能となっている。	○	入居者の身体状況などに大きな変化がみられない場合は、定期的な見直しが遅れ勝ちになることがある、ということであったが、「変化がない」と思われる状況でも、改めて見直すことで、変化の前兆などが発見されることも多い。見直しの遅れを防ぐ対応も必要かと思われる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	病院への受診同行や、帰宅願望に付き添っての実家訪問など、その時々要望に応じた支援が実施されている。前年度まで生活を展開していた旧ホームは、「デイサービスセンター」として、ホーム入居者以外の地域高齢者が利用されており、時には入居者との交流を図り、生活に変化が付けられている。	○	
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	通院介助は、入居時に家族の同意を得ているが、状況に応じてホームで対応し、かかりつけ医の往診も利用。管理者が看護師で主治医の指示による手当てや点滴・治療が実施され、受診後は家族との情報交換に注意が払われている。また、歯科検診の訪問が毎週一回あり、本人の状況に応じて治療や手当てが実施されている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	家族・本人からの希望で、看取りを実施した経験を持つ。当事者の意向と気持ちを大切に、かかりつけ医と連携をとりながら、安心した暮らしの続きとしての「看取り」が行なわれ、家族から感謝状が贈られている。また、旅立った利用者が元気だった頃のホームでの様子や、楽しい表情をビデオに編集して残し、居なくなった仲間を懐かしむ様子も見られた。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	プライバシーに関しては、多様な場面での配慮・意識付けを、職員へ徹底して行なっている。ソファに座ったまま失禁した入居者に対して、何事もなかったようにトイレへ誘導し、衣服の着替えまで手際よく対応する職員の様子や、食事時、車椅子から普通の椅子への移乗等も、気付いて見ていないと見過してしまうように自然体で、入居者を尊重する対応であった。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「今日は裁判はなかったかね」繰り返しの質問に「今日も明日も裁判はお休みだから、ゆっくりしてね」の答を聞き、安心してソファで寛ぐ入居者。縁側で一文字の根を揃える入居者、ベッドで寝転ぶ人、テレビを見る人…さまざま。理念である「我のままに暮らす」を尊重した支援が見られた。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	介護度の高い入居者が多く、調理に参加できる人は居らず、野菜の下拵を手伝う等で、意識の高揚としている。それでも、下膳を手伝ったり、周囲の人の食事を気遣う入居者へ「ありがとう」と、感謝の声を掛ける職員との関わりは、優しいものであった。調理担当の職員が配置され、他の職員が入居者に係わるゆとりがみられる。	○	一緒に食事をした入居者が「今日のおかずは何というだろうか」と、尋ねられた。食事前に「今日は○○を使った○○ですよ」と、食事メニューを紹介してあげるのも、食べることの認識・確認ができ良いと思われる。
23	57	○入浴を楽しむことができる支援	個別の入浴日を決めず、入居者のその日・その時の、気分や体調に合わせた入浴支援が行われている。入浴嫌いでも、排泄後の清潔保持のために、少々強制的な入浴にならざるを得ない事もあり、苦慮されていたが、入居前は機械浴対応だった方が、職員二人掛かりの支援で、気持ち良い入浴を体験し、その後もゆとり入浴を楽しめるようになった例もあり、継続した努力が行われている。	○	入浴嫌いの入居者への対応は難しいが、菖蒲湯・ゆず湯・薬草湯など変化を付けて、全員で話題を盛り上げてみるのも、時には良いかと思われる。今後も諦めない対応に期待したい。
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	「楽しみは昼寝」と、にこやかに話してくれる入居者もあり、張り合いや役割を与えることが何なのか、考えてしまいが、縁側で職員と世間話をしながら、ひとじの根柢えをする入居者の姿は穏やかで温かいものだった。食事時、配膳や下膳をイソイソと手伝う人、「何か手伝おうか」と声掛けする人、気持ちだけ現役を保つ人、それぞれの対応が見られた。	○	入居者の「楽しみ」は何か、「気晴らし」は何か、時には入居者と職員で、真剣に話し合う事も良いと思われる。
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	ホーム入居後も「自分の家は?」とか「家に帰りたい」の気持ちを持ち続けている人もおり、スタッフと共に自宅を見に行ったり、日帰りで家庭訪問を行っている。家を忘れないように、また、家族との思い出を知るなど、家とホームを断ち切らないための外出支援や、入居者の状況に合わせ、外食やコンサートへの外出経験もあり、多様な外出支援計画が行われている。	○	多様な外出プランも入居者の重度化に伴い、実施が難しくなっており、入居者の状況に合わせ、軽度な負担で行きやすい外出先等を模索されている。重度になってもホームだけの生活にならない対応の努力と成果に期待したい。
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	居室に鍵はなく、玄関は職員の手が薄くなる夜間のみ(時として夕方から)の施錠で、常にオープンな状況。入居者の外出願望には、時間・天候に関係なく対応し、ドライブ等で希望への対処としている。言葉によるダメ出しも、「意識への鍵かけ」と捉え、職員の研修に組み入れている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	地域推進会議で町内消防団への協力依頼や、校区公民館へ避難場所としての協力を依頼しており、消防署の協力を得、初期消火・通報・避難誘導、そして消火器の使い方などを含めた防災訓練を年2回実施している。ただ、地域住民との合同での開催には至っていない。	○	地域への協力依頼はできており、その意識を持ってもらっているが、訓練の実施が大切と思われる。町内会や消防団へ企画書などを持ち込み、実施への道筋を付ける事も一案と思われる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分摂取のチェックを小まめに記録する姿が確認された。個別記録の転記は事務所で行うが、確認後の記録は洩れがないように、担当職員がリビングの隅で入居者と会話をしたり、見守りながらすぐ記載している。「お茶飲みませんか?」「紅茶あげましょうか」水分補給は多様に勧められ、食事についても摂取量への目配り・声掛けがみられた。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間は、ワンフロアを広く取る方法ではなく、リビングを中心に、広縁・掘り炬燵のある茶の間と、入居者が好きな場所を選んで時を過ごす工夫がある。どの空間も、気負わない普通の家庭の雰囲気で、「他所」を感じさせない生活空間となっている。空気の入替えも充分にあり、高齢者特有の住居臭もなく、居心地良く感じられた。	○	広さや飾り付けなどハード面での工夫より、職員との会話や、頬擦り寄せ、肩組み合うボディタッチで作り上げられる雰囲気が、真似では出来ない「心地よい空間」を作り上げていると感じた。意識されていないと思われるが、形にないソフトでの空間作りを今後とも期待したい。
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者毎に異なる居室は、本棚・机・箆笥など、使い慣れたものや写真や飾り物がある部屋と、モノが少なくさっぱりとした部屋と様々だが、本人にとっての心地良さを大切にしているとの事であった。ベッドがメインで他に道具が少ない居室は寂しく感じたが、居室に置かれた「もの」が、入居者にどのような思い出・想いを抱かせるものなのか、ヴァリデーションを行ない探究する事も良いと思われた。		

自己評価票

- 自己評価は全部で100項目あります。
- これらの項目は事業所が地域密着型サービスとして目標とされる実践がなされているかを具体的に確認するものです。そして改善に向けた具体的な課題を事業所が見出し、改善への取り組みを行っていくための指針とします。
- 項目一つひとつを職員全員で点検していく過程が重要です。点検は、項目の最初から順番に行う必要はありません。点検しやすい項目(例えば、下記項目のⅡやⅢ等)から始めて下さい。
- 自己評価は、外部評価の資料となります。外部評価が事業所の実践を十分に反映したものになるよう、自己評価は事実に基づいて具体的に記入しましょう。
- 自己評価結果は、外部評価結果とともに公開されます。家族や地域の人々に事業所の日頃の実践や改善への取り組みを示し、信頼を高める機会として活かしましょう。

地域密着型サービスの自己評価項目構成

	項目数
I. 理念に基づく運営	22
1. 理念の共有	3
2. 地域との支えあい	3
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	5
4. 理念を実践するための体制	7
5. 人材の育成と支援	4
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援	10
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	4
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	6
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	17
1. 一人ひとりの把握	3
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	3
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	10
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	38
1. その人らしい暮らしの支援	30
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	8
V. サービスの成果に関する項目	13
合計	100

○記入方法

[取り組みの事実]

ケアサービスの提供状況や事業所の取り組み状況を具体的かつ客観的に記入します。(実施できているか、実施できていないかに関わらず事実を記入)

[取り組んでいきたい項目]

今後、改善したり、さらに工夫を重ねたいと考えた項目に○をつけます。

[取り組んでいきたい内容]

「取り組んでいきたい項目」で○をつけた項目について、改善目標や取り組み内容を記入します。また、既に改善に取り組んでいる内容・事実があれば、それを含めて記入します。

[特に力を入れている点・アピールしたい点](アウトカム項目の後にある欄です)

日々の実践の中で、事業所として力を入れて取り組んでいる点やアピールしたい点を記入します。

○用語の説明

家族等 = 家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家 族 = 家族に限定しています。

運営者 = 事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者(経営者と同義)を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員 = 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム = 管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

○評価シートの説明

評価調査票は、プロセス評価の項目(No.1からNo.87)とサービスの成果(アウトカム)の項目(No.88からNo.100)の2種類のシートに分かれています。記入する際は、2種類とも必ず記入するようご注意ください。

事業所名	グループホーム あい
(ユニット名)	
所在地 (県・市町村名)	熊本県八代市863-3
記入者名 (管理者)	永田 いつ子
記入日	平成 20年 2月 10日

地域密着型サービス評価の自己評価票

(部分は外部評価との共通評価項目です)

取り組んでいきたい項目

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営				
1. 理念と共有				
1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	”出会い・ふれあい・支えあい・慈しみあい”という理念の基その人がその人らしく暮して行けるように”我のまま暮らす”をホームの理念としているが、具体的に明文化していない。	○	”我のままに暮らす”こととはどういうことなのかを、場面場面で問いかけて職員と話あい作り上げていく予定にしている。
2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	その時々職員に対し、伝えている。 ”我のままに暮らす”ためにはどのような関わりを行っていくかを勉強会で話し合い、具体的な関わりかたを見えるところに張り出している。	○	日々のケアを振り返る指針として、職員に対し深めて生きたい。
3	○家族や地域への理念の浸透 事業所は、利用者が地域の中で暮らし続けることを大切にしたい理念を、家族や地域の人々に理解してもらえるよう取り組んでいる	入居相談時・入居時理念が出来た経緯を説明している。 また、運営推進会議第一回目において理念について説明を行った。理解してもらえているかは確認していない。 見学者に対しては理念についての説明は行っている。	○	運営推進会議の委員の交代もあっているため、具体的に言語化した後説明を行いたい。 又、家族に対しても説明の機会を作りたい。
2. 地域との支えあい				
4	○隣近所とのつきあい 管理者や職員は、隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらえるような日常的なつきあいができるように努めている	ご近所の方や、町内の方と日常的な挨拶や立ち寄ってもらえるような声かけは、行っているが、新家屋が道路より奥に入ったため、道路に近い当社のデイサービスには、寄ってもらえているが、ホームまでにはなかなか来てもらえないのが実状である。	○	運営推進会議の委員への働きかけ・協力と共に、ホームにおいての行事などを通し、立ち寄りやすくするための話し合いをおこなっていききたい。
5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	町内会に入り、町内会でされる行事や校区での敬老会や公民館祭りなどに積極的に参加している。 近隣のかたから野菜などをいただくことも多い。 散歩に出かけた時に挨拶や日常会話を持つようにしている。	○	現在、老人会への入会を検討してもらっている。

項 目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	○事業所の力を活かした地域貢献 利用者への支援を基盤に、事業所や職員の状況や力に応じて、地域の高齢者等の暮らしに役立つことがないか話し合い、取り組んでいる	当ホームに出来ることがあれば、という声かけはしているがそれ以上の積極的な取り組みは行っていない。	○	運営推進会議に地域住民の代表の方々が参加されているので、その場を通しホームに出来る事はないかを積極的に聞いていきたい。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用				
7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価については、全員で取り組んでいるが、詳しい説明は出来ていない。 外部評価の結果はミーティング等で報告し改善に向けての努力はしている。	○	自己評価・外部評価の目的や内容についての説明を時間を掛けて行いたい。
8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームからの報告だけではなく、委員の方からの意見・評価・質問などいただいている。又いただいた意見はミーティング等で職員で共有し改善点はすぐ取り入れている。 自己評価・外部評価については、結果を報告しているが、なかなか意見をいただくまでにはなっていない。	○	ホームに対する評価や、意見は少しずついただけるようになってきたので、自己評価・外部評価についても結果報告後の意見をいただけるように働きかけて生きたい。
9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	グループホーム・宅老所八代連絡会の勉強会の講師紹介など、ケアの質向上に向けた取り組みに対し協力してもらっている。 また、質問に対しても丁寧な回答をもらっている。	○	グループホームに対する期待や望むもの、ホーム側からの要望など、行政の担当者の方と話ができる機会を持ちたい。
10	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、地域福祉権利擁護事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、必要な人にはそれらを活用できるよう支援している	管理者は研修の機会があるが、職員の研修の機会がないため、職員への説明は行っている。	○	ホームの勉強会において次年度の計画に予定する。
11	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内で虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者は研修の機会があるが、職員の研修の機会がないため、職員への説明は行っている。 又、職員のストレスが最小に止められるように注意を払っている。	○	勉強会において高齢者虐待法について行う。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
4. 理念を実践するための体制				
12	○契約に関する説明と納得 契約を結んだり解約をする際は、利用者や家族等の不安、疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	当ホームのケアの考えや、看取りに対する考え方について契約時に丁寧に説明を行い家族に同意を得ている。また、疑問点についてや意見など言いやすい雰囲気を作るように努力をしている。	○	年度の替わり目に家族から意見を聞き必要時説明を行っていく。
13	○運営に関する利用者意見の反映 利用者が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者からの意見等を聞くことはなかなか難しい現状であるが、会話の中での、希望などをプランに反映させ実行できるようにしている。	○	日常のなかから利用者の不満・苦情となることを気づくことが出来るような感性を磨いていきたい。 面会時等家族の方が気づかれたことを聞き取れるようにする。
14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々に合わせた報告をしている	面会時担当職員により状況の説明を行っている。健康状態など変化が見られたときには管理者または介護主任よりTELなどで報告を密に行っている。金銭管理に対しても面会時出納簿を確認してもらいサインを頂いている。面会の少ない家族に対する報告は変化のみの報告となっている。職員の退職等の報告は運営推進会議で報告を行い、出席されていない家族に対しては議事録に残しわたしている。	○	面会が少ない家族に対し、担当者が手紙を書くように計画をしているが充分といえる回数ではない。
15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎回ではないが、面会時に意見等がないかを尋ねるようにしている、また言ってもらえる雰囲気作り努力している。意見・苦情・不満が聞かれたときにはよりよいケアとなるよう解決に向けての準備は整っている。	○	時期を決めて意見・不満・苦情が聞ける機会を作りたい。
16	○運営に関する職員意見の反映 運営者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員との日頃からの関係作りに努力している。意見や要望・苦情など言いやすい関係になっていると思うが言いにくい部分に関しては介護主任が聞き役となり報告を受けできるだけ改善が出来るように努力している。	○	定期的に要望や意見が言える場を検討していきたい。
17	○柔軟な対応に向けた勤務調整 利用者や家族の状況の変化、要望に柔軟な対応ができるよう、必要な時間帯に職員を確保するための話し合いや勤務の調整に努めている	新規入居の時は昼夜とも人員配置を厚くしている。利用者の状況に合わせた勤務体制になっている、また職員の協力も大きい。 管理者が看護師でもあり、利用者の状況・職員の状況に応じ24時間いつでも駆けつけられるようにしている。また必要に応じホーム内での待機も行っている。	○	家族の方が安心出来るように、管理者と職員との信頼関係の構築を続けていく。(管理者と職員が利用者の視点で同じ方向性を持って行く為に)
18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	離職者が少なく管理者が運営者でもあり、常に現場にいる事で利用者へのダメージは少ないと思われる。	○	今後、離職希望者が増えるとも考えられるため、職員と十分な話し合いを持ち利用者への影響が少ない方法を考えていきたい。

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
5. 人材の育成と支援			
19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	2回/月施設内での勉強会を実施、また1回/月GH連絡会の勉強会に参加している。 施設外研修にも出来るだけ全職員が参加できるようにと計画している。県で行われている実践者研修・実践リーダー研修も受けているが、職員の段階に応じた計画は今、検討中。	○ 来年、介護福祉士を受けられる資格を得る職員が数名いる為、習得に向けての勉強会を予定している。 県主催の実践者・実践リーダー研修への申し込みも行ってきたい。
20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	GH八代連絡会での勉強会等を通しネットワークは少しずつ出来ている。 当ホームへの研修受け入れ等は行っているが、当職員が他施設訪問には至っていない。	○ GH八代連絡会を通し職員間のネットワークが出来る様な働きかけを行ってきたい。
21	○職員のストレス軽減に向けた取り組み 運営者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる	管理者が運営者であり、常に現場にいる事から職員の表情などから気づくことができ、いち早くに話が出来状態にある。また、介護主任が職員に変化に気づき相談相手になっている。 夜間など職員が不安と思う時には状況を見ながら管理者がホームにおいて待機をしたり、24時間連絡が受けられるようにし、職員のストレスを最小限にするように非常に気を遣っている。	○ ホーム外での発散の機会をなかなか作れていないので、業務外での交流の機会を増やしていきたい。
22	○向上心を持って働き続けるための取り組み 運営者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、各自が向上心を持って働けるように努めている	職員の良い点を認め言葉にして本人へ伝えている。 職員がケアに対し提案をした時には提案内容が利用者にとって適切なものかを提案者としてしっかり話し合い実行に移している。このことから職員本人が向上心を持ちもって学びたいとの申し出があっている。 個人面接を行い各職員の意識の向上に努めている。	○ 今後も職員の良い点を認め伝えていく。 本人力が最大限引き出せるよう一緒に考え行動に移せるようにする。
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援			
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応			
23	○初期に築く本人との信頼関係 相談から利用に至るまでに本人が困っていること、不安なこと、求めていること等を本人自身からよく聴く機会をつくり、受けとめる努力をしている	家族が困っていること、求めていることについては、相談の時点でじっくり聴くようにしている。又入居が決まれば、本人へ会いに行き 思いを感じ取れる努力をしている。	○ 本人からの困りごとを聞くことはなかなか難しいことが多いことから、家族からの話しの中から、本人にとっての困り事を受け取るアセスメントの能力を身につける。
24	○初期に築く家族との信頼関係 相談から利用に至るまでに家族等が困っていること、不安なこと、求めていること等をよく聴く機会をつくり、受けとめる努力をしている	家族の困っていること・求めていることについては、相談の時からしっかり聴くようにし、受けとめるようにしている。 ホームとして出来ることについても開始前に話し合っている。 家族の思いを受け止めるため一回限りではなく複数回の時間をとっている。	○ 時間はかなり取って聴いているが、家族の満足のいくものになっているかの聞き取りはしていない。このことについて今後家族の意見を聞く機会を作りたい。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
25	○初期対応の見極めと支援 相談を受けた時に、本人と家族が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当ホームで受け入れが出来ない時でも、真剣に相談に乗り、その中で必要と思えるサービスや他の施設提案をしている。 繰り返しの来訪や現状についての相談を受けたりする事もある。	○	相談だけでも乗ることで、少しでも相談者の気持ちの負担が軽減するのではないかと考えているので、今後も真剣に相談に乗っていきたい。
26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心して、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	家族の入居前の見学はあるが、本人がホームを見学したり、納得して入居するということは難しいことが多く、体験をして入居する事例は今までに無い。入居前に面接に行くことで入居時知った顔が居るといふ少しいの安心から開始する事に至っている。 入居後は勤務人数を増やしたり、夜間の待機など本人の不安を最小限に軽減できるようにし、少しでも安心して生活が出来るようにしている。	○	入居前の体験が出来るだけ可能となるような取り組みを家族を含め考えていきたい。
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援				
27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	利用者とうゆっり過ごす時間を多くは取れないが、介護をしてあげているという思いは少なく、一緒に過ごす家族としての意識が大きく、共に喜び・楽しみ・悲しみ・怒りを共有している。人生の先輩としての利用者から多くの事を学んでいる。	○	介護してあげているという意識が強くなならないような働きかけ(研修会や現場の中で)をおこなっていく。
28	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽を共にし、一緒に本人を支えていく関係を築いている	担当職員が決まっており、来訪時に日頃の状況の報告や相談など家族に行い、家族と一緒に本人にとっての困りごとについて考えている。	○	家族からの意見が言い出しやすいような雰囲気作りや、信頼関係作りを更に築いていく。
29	○本人と家族のよりよい関係に向けた支援 これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係が築いていけるように支援している	家庭訪問を繰り返しい家族の再構築が出来た事例がある。 又、本人・家族の状況を見ながら外出・外泊を促しており、そのことで家族の自信となり、定期的に外泊の受け入れが出来るようになった家族もおられる。	○	ホーム側の思いだけで押し付けにならない様にするためにも、家族の方の思いを知り受け止めることの大切さを知ることが、本人との良い関係作りになると考えている。このことを職員で考えていきたい。
30	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	見慣れた風景を見て感じることで、気持ちが落ち着かれる利用者の方がおられ、定期的にその場所に行くようにしている。 また、利用者のご近所の方や親戚の方が時々訪問される事がある。	○	今後、利用者からご近所の方や友人の方を訪問する事が可能か、家族の方と相談し検討したい。
31	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるように努めている	職員から場の設定をする場合もあるが、入居者同士その場その場においての関わりがあっており互いに微笑ましい光景や助け合いが見られることもある。急に気分に変化が起きることもあるので注意して見守ることも行っている。	○	入居者同士の関わりが増えるように、職員側からの仕掛けを行う様にしている。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
32	○関係を断ち切らない取り組み サービス利用（契約）が終了しても、継続的な関わりを必要とする利用者や家族には、関係を断ち切らないつきあいを大切にしている	退去された本人と家族を含め、行事への誘いや年賀状を出したりしている。 行事以外にも時々、訪問される事がある。	○	今後も、訪問しやすい雰囲気を作っていき気軽に訪ね来てもらえるようにするために、お便りを出すことを続けていく。
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
1. 一人ひとりの把握				
33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人から暮らし方の希望を聞くことは難しい場合が多くその時々言葉や表情から推測し関わるようにしている。家族から話を聞き少しでも本人の思いに近づけるようにしている。	○	日常の中での本人の表情や行動を良く見ることで、出来るだけ本人の意向に沿えるようにしていく。
34	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	担当職員が家族との信頼関係を築きながら本人の生活歴や、これまでの暮らし方など状況によっては家庭訪問を繰り返しながら把握するように努力している。	○	日々の業務に追われ家族からの情報を聞き逃さないように努力する。
35	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状を総合的に把握するように努めている	一人ひとりの過ごし方を大切にしている。出来ることを職員とともども一緒に喜び、他職員とも情報の共有をしている。	○	日々の業務に追われ出来ることに対してもつつい手を出してしまわないようミーティング等において意識付けをしていく。
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し				
36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	担当職員が中心となり評価を行い他職員の意見を聞きケアプランへ反映させている。 家族からの要望・意見を聞きプランの作成を行っている。	○	家族からの意見が自由に言えるような雰囲気や場の設定を行う。
37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	大きな変化が見られない場合は見直しが遅れるときがあるが、状態変化時は家族・主治医等への報告・相談を行い計画を作成している。	○	期間が終了する前に見直しが遅れないようにする。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
38	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	勤務開始前に個人記録を読み情報を共有しケアに入っている。	○	記録に本人の言葉を多く書くようにし、その言葉の中から気づきを見つける工夫をする。
3. 多機能性を活かした柔軟な支援				
39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	受診や入院時の早期退院、又終末期の看取り等の支援など、本人や家族の状況・要望を聞き柔軟に対応している。入居者の状況に応じ訪問看護ステーションを利用する事もある。 音楽療法・回想法などを取り入れた「元氣くらぶ」を一回／月実施している	○	ホーム内でのデイ利用が可能なことを運営推進会議等の中で積極的に紹介していく。
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働				
40	○地域資源との協働 本人の意向や必要性に応じて、民生委員やボランティア、警察、消防、文化・教育機関等と協力しながら支援している	運営推進会議や校区の公民館・町内の消防団・看護学生のボランティアの方と入居者の支援について意見交換を行っている。 行事の時にはボランティアの協力もある。 散歩時など近隣住民の方たちからの支援をいただいている。	○	運営推進会議以外の方たちとの意見交換をする機会を多く持てるように計画をしたい。
41	○他のサービスの活用支援 本人の意向や必要性に応じて、地域の他のケアマネジャーやサービス事業者と話し合い、他のサービスを利用するための支援をしている	校区開催の敬老会には毎年参加しているが、老人会への参加などは出来ない。 不定期ではあるが、同敷地内にあるデイサービスに参加している。 入居者の状況に応じ訪問美容サービスを利用している。	○	老人会への加入など入居者の状況や本人・家族の意向を聞きながら検討していきたい。
42	○地域包括支援センターとの協働 本人の意向や必要性に応じて、権利擁護や総合的かつ長期的なケアマネジメント等について、地域包括支援センターと協働している	地域包括支援センターとの協働は行っていない。	○	運営推進会議へ地域支援センターの職員の方の参加を検討していく。
43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診については、本人の状況に合わせて対応している。 通院介助に対しては入居時説明を行い同意を得ている。 入居者の状況に応じ、かかりつけ医からの往診を受けている。 受診後は家族との情報交換を行っている。 入居者の状況に応じ歯科往診を受けている。	○	往診が難しいかかりつけ医もあり、今後重度化に伴い検討していく課題である。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
44	○認知症の専門医等の受診支援 専門医等認知症に詳しい医師と関係を築きながら、職員が相談したり、利用者が認知症に関する診断や治療を受けられるよう支援している	認知症の専門医ではないかかりつけ医が多いが、認知症の方に対しても熱心で、家族や・職員からの相談にも気軽に応じてもらえている。	○	かかりつけ医の医療機関に対し認知症に関する情報を積極的に提供していきたい。
45	○看護職との協働 利用者をよく知る看護職員あるいは地域の看護職と気軽に相談しながら、日常の健康管理や医療活用の支援をしている	管理者が看護師であり、また役員も看護師であり、日常的にも健康管理や職員への指導も行っている。パート職員として看護師1名採用している。 併設の訪問看護ステーションとの契約もしており週一回の健康チェックや職員も気軽に相談ができ助言をもらっている。	○	重度化している入居者や医療面の多い入居者が多いことから、家族の方の安心ももちろんだが、職員も精神的にも安心してケアが出来る体制を継続していく。
46	○早期退院に向けた医療機関との協働 利用者が入院した時に安心して過ごせるよう、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて連携している	入院になった場合、家族の意向を確認しながら、かかりつけ医や担当医と相談をしながら、出来るだけ早期退院が可能となるような働きかけを行っている。	○	今後も入院が発生した場合早期退院が可能となるような働きかけを行っていく。そのためには職員の指導の強化も必要。
47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	家族・本人の希望があれば看取りを実施することを契約時説明し同意を得ている。 看取りの時期に入る前に家族・職員と話し合いを行っている。 かかりつけ医・家族・ホームとの話し合いも行い職員への情報提供を行い、ケアに結び付けている。	○	往診の出来ないかかりつけ医の場合、在宅療養支援診療所の紹介など情報の提供や理解を求めていく。
48	○重度化や終末期に向けたチームでの支援 重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、事業所の「できること・できないこと」を見極め、かかりつけ医とともにチームとしての支援に取り組んでいる。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている	本人・家族の意向を聴き、本人の気持ちを大切に、職員全員で、家族も本人も安心して最期を迎えられるように関わりをもっている。かかりつけ医の(全てではない)協力も大きく昨年の暮れに看取りをしたが、かかりつけ医・家族・職員とも方針について十分に話し合いを行い実施した。	○	認知症の方でも一人の人間として大切に考えられ、可能な限り日常生活の中で終末を迎えられるように体制を継続していく。 職員は、看取りを通し学びも大きい、精神的な負担も大きい、又人員配置にも無理が来ることから、人員を投入するためには介護報酬の見直しを提言していく必要がある。
49	○住み替え時の協働によるダメージの防止 本人が自宅やグループホームから別の居所へ移り住む際、家族及び本人に関わるケア関係者間で十分な話し合いや情報交換を行い、住み替えによるダメージを防ぐことに努めている	自宅に退去される入居者を退去前から次のサービスのデイサービスに馴染むように情報交換を行い、ホームから週1回利用を開始し、退居となった事例がある。	○	自宅への退居・別なサービスへの切り替え時など本人にとってダメージを最小限にするための十分な情報交換や退居前の次のサービスの体験を行っていく。

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援			
1. その人らしい暮らしの支援			
(1)一人ひとりの尊重			
50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	○	ミーティングや勉強会を通しプライバシーに関し意識向上をはかる。
51	○利用者の希望の表出や自己決定の支援 本人が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた説明を行い、自分で決めたり納得しながら暮らせるように支援をしている	○	「～だろう」という職員の思い込みでのケアにならないように本人の思いを感じ取れるような研修を行い、本人の意思が叶うケアが提供できる職員の育成をしたい。
52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	○	重度化している入居者や介助者が多くなり以前に比べ希望時に即対応が難しいときがある。柔軟に対応できるための対策を職員同士意見交換を行い対応策を考えたい。
(2)その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援			
53	○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援し、理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている	○	必ず本人へ確認後、着替えを行うこと、家族の要望の意味を職員間で考えケアにいかしたい。
54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	○	介助者や嚥下が困難な入居者の方が増えてきたので、高齢者用のソフト食の作り方など研究していく必要性を感じている、ミーティングや勉強会等で意見交換を行い職員の嗜好にならないようにしていく。
55	○本人の嗜好の支援 本人が望むお酒、飲み物、おやつ、たばこ等、好みのものを一人ひとりの状況に合わせて日常的に楽しめるよう支援している	○	意思を伝えられない入居者に対する支援の方法を考えていく。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
56	○気持ちよい排泄の支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして気持ちよく排泄できるよう支援している	入居時排泄パターンを数日にわたりチェックすると同時に時間毎にトイレ誘導を行い、オムツ外しに取り組み外れた入居者も多い。	○	継続していく。
57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴の時間は午後からに一応決めているが、入居者の状況を見ながら「今」を見ながら時間に関係なく柔軟に対応している。 入浴が嫌いな入居者に対し職員は心を痛めながらも強制的に行っていることもある。	○	入浴嫌いな入居者を気持ちよく入ってもらうための方法を常々職員と意見交換を行っているがなかなか成功しない、今後も諦めずに取り組んでいく。
58	○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、安心して気持ちよく休息したり眠れるよう支援している	入居者の状況に応じ日中に休息や、夜間自室での就寝を嫌がられるときには無理強せず安心して眠れる場所で寝てもらおうようにしている。	○	日中の活動をもう少し取り入れることを検討していく。
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援				
59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	出来ることへの言葉かけを行い家事を手伝ってもらっている。 誘い方で、自分から進んで「何かすることない」と職員へ声をかけられることもある。 業務に追われ、分かっている職員だけで動いてしまうことがある。	○	職員の気持ちにゆとりが持て、入居者の楽しみや役割が実現できるための方法について意見交換をおこなっていく。
60	○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出時(買い物・受診時)に本人の財布を渡し、会計をしてもらっている。	○	自分の手元にお金がないことで不安をもたれることがあるので、本人が出来る金銭管理の方法を検討していく。
61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	その日の天候とその日の入居者の状況その日の職員によって外出や、外での食事を行っている。	○	入居者の重度化に伴い全員での外出が難しくなっている。遠くでなく近くに出かけられる場所の確保や、出かけられる入居者での外出などさまざまな支援の方法を考えていく。
62	○普段行けない場所への外出支援 一人ひとりが行ってみたい普段は行けないところに、個別あるいは他の利用者や家族とともに出かけられる機会をつくり、支援している	自宅に帰りたい入居者に対しては家族の協力の下計画を立て職員と一緒に付き添い一日を自宅で過ごすこともある。 映画・コンサートなど計画を立て出かけることもある。	○	希望時すぐ対応できることはないか検討していく。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
63	○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者の希望により自宅へ電話することがあり、家族からの電話の出られ話をされることがある 年賀状など入居者より書いてもうことの計画を立て実行されていない。	○	家族へ手紙を出すことをぜひ実現したい。
64	○家族や馴染みの人の訪問支援 家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪問でき、居心地よく過ごせるよう工夫している	いつでも訪問できるような雰囲気はできていると思うが、ご家族などに確認はしていない。 帰られるときは又いつでも来てくださいと声をかけるように徹底している。面会時間の設定はない。	○	訪問時職員がお茶を出すことに気を使われる家族もおられその事をどう考え、訪問しやすくするために職員間で意見交換をしていく。
(4)安心と安全を支える支援				
65	○身体拘束をしないケアの実践 運営者及び全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、身体拘束をしないケアに取り組んでいる	時に言葉による拘束が聞かれるときがありそのときに理由を聞き職員に考えてもらうようにしている。それ以外の拘束は無いと自覚している。	○	職員の意識が薄くならないように勉強会の取り入れていき意識を統一する。
66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	8:00から20:00ころまで玄関には鍵はかけていない。 入居者の方が外に出たいときは時間・天候に関係なく一緒に出かけたり、ドライブに出かけている。 18:00から職員の手が薄くなり、入居者の状況に応じ鍵をかけることもときがある。	○	継続していく。
67	○利用者の安全確認 職員は本人のプライバシーに配慮しながら、昼夜通して利用者の所在や様子を把握し、安全に配慮している	所在の確認をさりげなく行っている。特に所在を確認することが必要な場合は職員同士確認しあっている。	○	夜間他の入居者のケアに入っているときに安全確認が難しいときがある。職員同士意見交換し対策を考える。
68	○注意の必要な物品の保管・管理 注意の必要な物品を一律になくすのではなく、一人ひとりの状態に応じて、危険を防ぐ取り組みをしている	包丁・洗剤など日常的になっており、その時々に入居者に危険と感じられたときに職員同士検討している。 事故防止としてのマニュアルはあるが、最近職員への意識の統一を行っていない。	○	マニュアルの見直しや職員の意識の統一をする。
69	○事故防止のための取り組み 転倒、窒息、誤薬、行方不明、火災等を防ぐための知識を学び、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組んでいる	ホーム内での勉強会で取り入れている。防災担当を決めチェックを行っている。 入居者の状況から予測されることを共有し事故防止に取り組んでいる。事故報告書を職員間で共有し防止に取り組んでいる。	○	常に入居者に目を向けておくことの重要性を職員に意識つけるために毎日のミーティングを通し日々のケアの振り返りを行っていく。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
70	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備え、全ての職員が応急手当や初期対応の訓練を定期的に行っている	年一回ホームの勉強会で行っているが、習得しているとはいえない。	○	勉強会を増やし(年2回)実践できるかチェックしていく。
71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	年2回の防災訓練を実施している。が地域の方との訓練は行っていない。消防署の協力の下、通報・初期消火・避難誘導や消火器の使い方の訓練をしている。地域への協力は、町内消防団へ協力のお願いや・校区公民館を避難場所としてお願いしている又運営推進会議のなかで協力をお願いしている。	○	町内消防団・近隣住民の方たちの協力を得ての訓練ができるような取り組みを検討したい。
72	○リスク対応に関する家族等との話し合い 一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にされた対応策を話し合っている	入居時に話し合いをしっかりと持ち同意を得ている。入居者の状況の変化に応じ家族にそのつど報告を行っている。	○	入居者の状況の変化を見逃さないために情報の共有を行っていく。 入居者の状況の変化時各担当者が家族に報告が出来るように指導を行う。
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援				
73	○体調変化の早期発見と対応 一人ひとりの体調の変化や異変の発見に努め、気付いた際には速やかに情報を共有し、対応に結び付けている	職員は入居者一人ひとりの観察を十分にしており、少しでも変化を感じたときはVSチェックをして、管理者(看護師)へ報告を行い早期の発見につながっている。	○	高齢者に多く見られる疾病・それによる症状など勉強会の計画を立て 少しの変化も見流さない職員の指導教育を行う。
74	○服薬支援 職員は、一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服用薬品名カードをファイルに入れ、いつでも見られるようにしているが、全職員が把握しているかの確認はしていない。 与薬時は3回確認を徹底している。	○	まず担当入居者の服用している薬品の名前と効能・副作用について把握するように指導している。
75	○便秘の予防と対応 職員は、便秘の原因や及ぼす影響を理解し、予防と対応のための飲食物の工夫や身体を動かす働きかけ等に取り組んでいる	水分のチェックや食事内容や乳製品を取り入れている。活動が少ない入居者に対しては他動的に運動を取り入れたり腹部の温罨法を行ったりしている。	○	自分で活動が出来ない入居者に対しての他動的活動が少ないので活動する事の意義を理解し積極的に行うように指導していく。
76	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や力に応じた支援をしている	毎食前・後歯磨きを行っている。 年一回歯科衛生士からの勉強会を行っている。また週一回歯科衛生士の訪問があり質問をしたり指導を受けている。	○	確実に定着しているが今後も意識を保つために年間の勉強会の計画に入れていく。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事を記録に残し少ないときは捕食をしてもらっている。水分量が少ないと感じたときはチェックを行い頻回に飲んでもらうようにしている。	○	食事・水分に関しては職員一丸となってチェックしており、入居者の状況に合わせた支援を行っている。
78	○感染症予防 感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、実行している（インフルエンザ、疥癬、肝炎、MRSA、ノロウイルス等）	マニュアルを作成してあり職員に周知している。洗面台に手洗いの方法を貼り、出勤時・排泄介助後・外出後・退社時にうがいと共に行うことを徹底している。市からの通達事項があった毎に職員に回覧しサインをしている。	○	昨年から入居者に対しインフルエンザの予防接種を、免疫効果を高めるため2回接種について協力医と話し合い、家族の同意も得て行っている。職員については1回接種になっている為検討が必要と考えている。
79	○食材の管理 食中毒の予防のために、生活の場としての台所、調理用具等の衛生管理を行い、新鮮で安全な食材の使用と管理に努めている	布巾・まな板など毎日消毒を行っている。食事の準備に取り掛かる前には必ず手洗いを行っている。食材は商店が遠いため買い置きをする事があるが、古くなったものは処分している。食中毒の時期には生ものは控えるなど特に注意している。	○	商店が遠いため買い置きが多くなってしまふことがあり、食材が古くなることもある。又他の業務に追われ冷蔵庫の掃除が出来ない事もある事から業務の見直しを行い、意識の統一を図る。
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり				
(1)居心地のよい環境づくり				
80	○安心して出入りできる玄関まわりの工夫 利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、安心して出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている	一般家庭の玄関と変わりなく親しみのある玄関になっている。玄関前にはプランターに花を植え、手作りの看板が迎えてくれる。昨年新家屋が奥に入ってしまった、近所の人たちが立ち寄りにくくなっている。	○	近隣の人たちが立ち寄り易くするための工夫を考え、散歩時等よってもらうような声かけをして行く。
81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食事準備の風景が見えるリビングのソファで過ごされている。縁側では朝日を浴びての日光浴やおしゃべりをして過ごす。リビング・廊下・縁側にソファや椅子があり、思い思いの場所で過ごされている。面会時には居室や談話室等で家族の時間をゆっくりとめられている。	○	つつい職員の声が大きくなる時があり、入居者にとって不快な声になっていないかを感じる時がある。勉強会において職員の私語について話し合いを行い入居者にとって聞きやすい声のトーン・入居者を交えての会話をするように取り組んでいる。
82	○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中には、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下・縁側・リビング・談話室と少人数でくつろげる場所がある。	○	現状を続ける。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者の生活スタイルに合わせた机・カーペット・写真・箆笥など家族の方が準備をされている。なじみの物が本人にとってどのような影響を与えるのか本人の状況から思いを知るように努めている。一人ひとりそれぞれに個性ある居室になっている	○	本人にとって居心地の良い居室になっているのかを表情などから推測できるような関わりを持ち居室作りを行いたい。
84	○換気・空調の配慮 気になるにおいや空気のおよみがないよう換気に努め、温度調節は、外気温と大きな差がないよう配慮し、利用者の状況に応じてこまめに行っている	湿度には特に注意を払い乾燥しないように加湿器を使用している。エアコンが入ったままになっていないか・換気については職員がお互いに声を掛け合いこまめに行っている。	○	動いている職員に合わせた温度設定になっていたりする事が見られることもある為入居者に合わせた室温になっているかその都度職員に対し声を掛けていくことで意識付けができてきている。
(2)本人の力の発揮と安全を支える環境づくり				
85	○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの身体機能を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	玄関は意図的に段差をつけている。段差がある事で認識ができ転倒は起きていない。廊下・トイレ・風呂には手摺をつけている。	○	各居室の家具の転倒防止に向け検討中。
86	○わかる力を活かした環境づくり 一人ひとりのわかる力を活かして、混乱や失敗を防ぎ、自立して暮らせるように工夫している	本人の状況を見ながら出来るだけ自分で出来るように工夫をしている。本人が納得できる言葉掛けや途中での声掛けなど本人が混乱を感じないような関わりを行っている。	○	入居者一人一人の「今」の状況を見極め常に職員同士での情報交換を行い統一した関わりを持つようにする。
87	○建物の外周りや空間の活用 建物の外周りやベランダを利用者が楽しんだり、活動できるように活かしている	建物の周囲の花を植えてあり、玄関に小さいベンチを置き夏は涼んだり外の花を楽しんだり出来るようになっている。新家屋になり畑が少し遠くなったため気軽に出かけられにくくなった。ウッドデッキを利用して外での食事や日向ぼっこなど楽しんでいる。	○	畑に出かける日を決めて出かけられるようにしたい。

V. サービスの成果に関する項目			
項 目		最も近い選択肢の左欄に○をつけてください。	
88	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる	○	①ほぼ全ての利用者の
			②利用者の2/3くらいの
			③利用者の1/3くらいの
			④ほとんど掴んでいない
89	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある	○	①毎日ある
			②数日に1回程度ある
			③たまにある
			④ほとんどない
90	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている	○	①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
			③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
91	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている	○	①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
			③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
92	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている	○	①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
			③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
93	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている	○	①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
			③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
94	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている	○	①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
			③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
95	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています	○	①ほぼ全ての家族と
			②家族の2/3くらいと
			③家族の1/3くらいと
			④ほとんどできていない

項 目		最も近い選択肢の左欄に○をつけてください。	
96	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている		①ほぼ毎日のように
			②数日に1回程度
		○	③たまに
			④ほとんどない
97	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている		①大いに増えている
		○	②少しずつ増えている
			③あまり増えていない
			④全くいない
98	職員は、生き活きと働けている		①ほぼ全ての職員が
		○	②職員の2/3くらいが
			③職員の1/3くらいが
			④ほとんどいない
99	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		①ほぼ全ての利用者が
		○	②利用者の2/3くらいが
			③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
100	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		①ほぼ全ての家族等が
		○	②家族等の2/3くらいが
			③家族等の1/3くらいが
			④ほとんどできていない

【特に力を入れている点・アピールしたい点】

(この欄は、日々の実践の中で、事業所として力を入れて取り組んでいる点やアピールしたい点を記入してください。)

- ・認知度の重度の人を重点的に受け入れをしています。重度の人でもその人らしく日常の生活は出来ます。そのために私たち専門性を持ったスタッフがいると思っています。
- ・わがままに暮してきた人、何もしたくない人、人の傍にいたい人、ズーと話をしたい人、など個人個人生活してきた過程は違います。それぞれが自分の思うように暮せるホームであり、笑いあり・けんかあり、悲しみあり、そんなことを皆で分かち合えるホームを目指しています。
- ・介護保険制度上、抑制・虐待防止の必要性をいわれているが基準どうりの人員配置では軽度の入居者の受け入れでないと実際に難しいと思えます。私たちの目の前にいる入居者は私たちと同じ、かけがえのない一人の人間です。入居者一人一人その家族も、又、職員とその家族も含め皆が大切にされ幸せになりたいと考えています。そのためにも、ぜひ介護報酬の増加を訴えていきたい。
- ・家族と共に話し合いを持ちながら、職員全員で心から大切にした終末期ケアを行っています。一つ一つの事例が大きな学びであり、宝物になっています。
- ・365日24時間管理者（看護師）が連絡体制を行い職員の不安・ストレスを最小限にし充実したケアが提供できる環境を作っています。